

イリヤさんの魔法少女 戦記

イリヤスフィール親衛隊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『このマジカルルビーちゃんと契約して魔法少女になっちゃってくださいー!』

第五次聖杯戦争が衛宮士郎を勝者として終決してから既に一年と半年。冬木のセカンドオーナーである遠坂凜が衛宮士郎とそのサーヴァントであるセイバーと共にイギリスの時計塔へと留学し、残された者たちはそのことに一抹の寂しさを覚えながらも、平穏で安寧の日常を日々謳歌していた。

そんなある日、突然イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの前に現れたマジカ

ルルビーを名乗るステッキ。その正体は魔法使いである宝石翁ゼルレッチが第二魔法により作り出した、人工天然精霊を宿すカレイドステッキと呼ばれる破格の性能を持つ愉快型魔術礼装だった。第二魔法そのものを扱えるというカレイドステッキ・ルビーは願いを叶えるかわりに魔法少女に為ってほしいという旨の契約をイリヤへと持ちかける。

『え？どうしてこんな契約を持ちかけるのか、ですって？イヤですね！ルビーちゃんの行動原理なんていつでもどこでもひとつですよ？』

——きつとオモシロオカシイことになるからです！

気まぐれ。暇潰し。お遊び。戯れ。愉快。愉悦。これは性格の破綻した娯楽至上主義のステッキと、元最強のマスターであるひとりの魔術師の少女の物語。

『さあ！行きますよ？？イリヤさん！わたしたちの魔法少女を始めましょう！』

※旧タイトル『魔法少女戦記プリズマ★ホロウナイト』

目次

プリズマ☆イリヤ編

【ルビー】『【ルビー】ちゃんど契約して魔法少女になっちゃってください!』

1

イリヤ「かつこいいかも……」

10

凛「あんたたちの存在って本当に魔術

師泣かせよね……」

19

【イリヤ】「よし、ソイツ殺すわ♪」

28

凛「なんであんたが遠坂家の家訓知っ

てんのよ……」

38

【イリヤ】「安心しなさい。お義姉ちゃんが手ずからインドウを渡してあげるから……」

49

美遊「あの人なら心配ないと思う、けど……」

60

【イリヤ】「甘いわね。そういうの、心の贅肉なんじゃなかった？」

71

番外編

— 冬木のホワイトクリスマス —

【イリヤ】「だ、大丈夫……これは、カップラーメンじゃないから」

81

プリズマ☆イリヤ編

【ルビー】『【ルビー】ちゃんと契約して魔法少女になっちゃってください!』

▽▽▽本編▽▽▽

世界と世界の狭間に存在しているある種の歪み。一部からは鏡面界と称される空間。可愛らしい桃色の魔法少女と黒い人型の影が戦闘を行っている様子を、中空に立ち、姿を消した状態で静観しているひとりの少女。

雪のような白い肌と白銀の髪に、ルビー色の瞳と黒紫のゴシックドレスがよく映えている。

傍らで浮遊していた五芒星の装飾に鳥のような羽を生やしたステッキが少女へと話しかける。

『あちやく……魔法少女として外見の完成度は認めますが、戦闘はからつきしといった感じですねー？そのところどう思います？ご自分がやられている姿を見るのは「イリヤ」さんのにはどうなんですかねー？』

「イリヤ」と呼ばれた少女はその言葉に眉をひそめて返事を返す。

「……【ルビー】、アナタの今の発言でひとつテイセイをさせて。あれは決してわたしではないわ。あの子はただの一般人。一方のわたしは魔術師。わたしたちは歩んできた人生も、培ってきた価値観も、物事の考え方も、きつとなにもかも違う。そういうのって、他人っていうんじゃないかしら？」

「イリヤ」の射竦めるような視線を華麗にスルーしつつ、「ルビー」と呼ばれたステッキは宙を舞うように飛び回る。

『他人ですかー？【イリヤ】さん意外とばつさりですねー？此方の世界のイリヤさんにはなにも思うところはないとおっしゃりますか？』

「イリヤ」は深く嘆息した。そして、飛び回っていた【ルビー】の柄を掴んで胸元に引き寄せる。

「思うところがないわけではないじゃない。この光景はなんというか、そう、フユカイね。とても見ていられたものじゃないわ」

静かなる感情の昂りに、「イリヤ」の内に秘められた莫大な魔力が波を立て始める。完

全なる臨戦態勢だ。

『おおう、【イリヤ】さんはフェイスはクールなのにハートはホットですねー?とうとう介入しちゃうんですか?』

その問いかけに【イリヤ】は不敵な笑みを称えた。

「無論よ。だって、その方がアナタとしてはオモシロイのでしょうか?」

『E x a c t l y ~♪』

弾むような声音で返答する【ルビー】。

「じゃあ、仮面をお願い」

『おや? 正体をお隠しになるの?』

「だってメンドーなことになるのはイヤだし。それに、まだ序盤なんでしょう? 正体バレはおあずけにした方が展開的にオイシイとは思わない?」

『流石【イリヤ】さん! さすイリ! さすイリです! ルビーちゃんは確信しました! イリヤさんこそ過去現在未来全ての時間軸をして最高のマスターです! いやあ、話のわかるマスターに巡り会えて【ルビー】ちゃんは本当に幸せですよ!』

「大袈裟ね。おだてたつてなにも出ないわよ?」

『オモシオカシイことを提供していただければ【ルビー】ちゃんはそれで構いませんよ? 元よりそういう契約ですからね!』

「フフツ、そうだったわね。じゃあ、アナタがお望みのオモシロオカシイを始めましょうか?」

『是非ありません! さあ、わたしたちの魔法少女を始めましょう!』

その言葉を合図として、「イリヤ」はステッキ・「ルビー」を構えて宙を蹴り、戦闘の最中へとその身を投じた。

▽▽▽

すべての始まりは。

西日本のどこかにある冬木と名付けられた街。一時期は魔術師たちによる血で血を洗うような争いの体を為した聖杯戦争と呼ばれる儀式の舞台ともなった街は、今ではすっかり元の静けさを取り戻していた。

そんな冬木の外れに位置する森の中に佇む、日本という国には不釣り合いな洋風のお城。名をアインツベルン城。

城の主である「イリヤスフィール・フォン・アインツベルン」。冬木で起こった聖杯戦争に参加した魔術師のひとりであり、紆余曲折あつて生き残った少女は、今日も今日とて特にすることはなく、その身を退屈に任せるように、まさに徒然なるままに、フカフ

カのソファに座って地に着かない足をブラブラとさせながら日課のテレビゲームに興じていた。

呆つとゲーム画面を眺めながら忙しなくコントローラーを弄り続ける。

と、突然に画面が静止してコントローラーの電池切れの表示があらわれる。

「……」

しばらく、画面と連動したようにそのまま静止していた【イリヤ】は、次にはコントローラーを放り投げて、傍らにあったクッションを抱き抱えゴロンとソファに寝転がる。

「エネルギープウ……」

愛用している電池の名前を恨めしげに呟く。城にストックしてある分はとうに使い切ってしまった。誰かに買いに行かせるにしても、使用人であるセラは食材の買い足しに出てしまっているし、もうひとりのリーゼリットも【イリヤ】の命により今やほぼ無人となった衛宮邸の掃除に赴いている。

足は愛車のメルセデス・ベンツエがあるのだし、自分で運転して買いに行けば済む話なのだが、今日の【イリヤ】はどうしてもそういう気分にはなれないで居た。

「……………次にシロウが帰って来るのは年末だったかしら？ あーあ、わたしも時計塔行けばよかったかなあ……………」

壁にかかったカレンダーを見ながらそうやって心にもないことをぼやいてみる。

たしかに「イリヤ」が弟であり唯一の家族である土郎とできるだけ共に居たいというのは本音なのだが、そこは物分かりもいしい空気も読めるというものだ。凜とセイバーの邪魔をしてやる気はない。人の恋路を邪魔するやつは馬に蹴られてなんとやら。それに時計塔に行つたところで「イリヤ」には今更学ぶことなどなにもないし、そもそも「イリヤ」には学ぶ時間などないのだ。

「ハア……」

静かな空間にひとりで居ると思考とはどうしてもネガティブになつていく。

「一体いつまで保つものかしらね……」

怠惰な日常が、なにも起こらない平穏で安寧の世界が、果たしていつまで続いていくものなのか。そして、自分はいつまで日常を謳歌し、享受し続けることができるのか。願わくば最後の時まで何事もなままに……。目を閉じようとしたその時。

「……ッ!?!」

大気中のマナが一瞬だけ波紋が広がったように揺らいだ。魔力の波を肌で感じとつた「イリヤ」は閉じていた目を見開き、横になつていた身体を起こして周囲への警戒を高める。

魔力感知をはたらかせながら揺らぎの元を辿る。

それは「イリヤ」のすぐ頭上であった。

「イリヤ」が天井を仰ぎ見るのと同時に空間に孔が開いた。そこからは明らかに質の違うマナが溢れだしている。

解析した「イリヤ」はその孔の正体に至り、驚愕に冷や汗を流した。

「第二魔法……」

『正解！正解！大正解〜！』

声と共に、孔からは五芒星の装飾に鳥のような羽を生やしたステツキが飛び出してきた。

そして、ステツキは呆然としているイリヤを尻目に声高々と名乗り向上をあげる。

『数多の世界を飛び越えて、マジカルルビーちゃんただいま参上〜！』

「マジカルルビー」と名乗ったステツキは「イリヤ」の目前へと降り立ち更に言葉を続けた。

『おはようございます！魔術師さん！今はお昼かもしれません！が、業界はいつでもおはようが基本ですよー！さてさて、さっそくなんですけども、アナタの願いを叶えて差し上げますから、その対価として……』

——魔法少女やりませんかー？

すべての始まりは、邂逅から。

▽▽▽解説▽▽▽

*マジカルルビー

魔法少女・凜を生み出し友人に距離を置かれるというトラウマを凜に植え付けてゼルレツチの宝箱へと封印されたカレイドステッキ……ではなく、フェイト／タイガーころしあむ アツパー等にて登場した、別の世界からやってきた別のカレイドステッキ。平行情界間を移動したり、ステッキ単体で行動可能な上にマジカルアンバーという人間形態をとったり、既に亡くなっているはずの衛宮切嗣やアイリスフィール・フォン・アイントベルンなどといった人物たちを他世界から招いたり、ほぼ第二魔法そのものを行使できる力を有している。

*エネルー普

商品名・単3電池。イリヤの愛用品らしい。とあるカーニバルなファンタズムでは、バーサーカーはじめてのおつかいにて、イリヤがバサクレスに買いに行かせたこともある。時代を越えた友情宝具『回転して突撃する蒼い槍兵・ブーメランスー』が生まれた、作者の個人的には伝説の回。

*メルセデス・ベンツエ

メルセデス・ベンツエ300SLクーペ。ベンツじゃなくてベンツエ。ここ重要。エンジンは排気量2966cc、直列六気筒SOHCのM198エンジン。最高時速は260キロ。ガルウイングのドアが特徴的。ボディカラーはやはりというか白銀。そのエンジン音はセラを陶醉させた。元は第四次聖杯戦争時に切嗣が、アイリスフィールとセイバーの冬木における足として運び込んでおいた物。本国のアインツベルン城にあった、アイリスフィール曰く「切嗣が持ち込んでくれた玩具」のひとつ。アイリスフィールの一番のお気に入りで、お城の中庭をぐるぐる回っていたという。現在はアインツベルンが所有するイリヤ送迎用の車両である。一応セラが使用を許されているが、イリヤがひとりで城を飛び出して来た場合は彼女が自分で運転して来ているとの事。あのちみっこが一体どうやって運転するんだ、なんてつつこみはするだけ野暮というものである。

イリヤ「かつこいいかも……」

▽▽▽本編▽▽▽

——騎英の……

「宝具が来るわ！逃げなさいッ！」

「え？なに？なんなの？」

凜が焦ったような叫びに、状況をいまいち呑み込めないイリヤは混乱し戸惑うばかりである。

『全ての魔力を魔術障壁と物理保護障壁に回します！耐えてくださいイリヤさん！』
「な、なにを!？」

霧囲気から危険が迫っていることはわかる。だが、戦いなど知らないイリヤには次はどう行動すればいいかなどまったくもってわからなかった。焦りと恐怖だけが募る。

英雄を英雄たらしめる切り札。サーヴァントの保有する宝具と呼ばれるそれは絶大

な威力を持つてしてイリヤを灰塵に帰さんと放たれる……筈であった。

流星群が降った。否、それは魔力塊の雨である。ひとつひとつが超高密度に圧縮された魔力の塊が隕石の如く降り注ぐ。それらはすべて一体のサーヴァントを狙って落ちて行き、対象を捕捉すると魔力を解き放ち次々と爆発を巻き起こす。

「きゃあ!？」

イリヤは爆風に吹かれ尻餅を着いてしまう。そして、そんなイリヤの前に黒紫のゴシックドレスに身を包んだ仮面の少女が静かに降り立つ。

「あ、あなたは……?」

「……」

イリヤが思わず漏らしたそんな問いかけに、仮面の少女は振り返るが返答はない。

そして、次の瞬間には逆巻く爆煙の中へと飛び込むようにしてイリヤの視界から消えてしまった。

『むむむ……あのキューティーでファンシーでラブリーな装飾のステッキは……いや、ですが、だとすれば……』

ルビーがブツブツと何事かを呟く隣で、へたりと地面に座り込んだままのイリヤは仮面の少女が消えた煙の中を惚けたように見つめていた。

颯爽と現れて自らのピンチを救い、何も告げずに戦闘を続行する正体不明な謎の仮面

魔法少女。

「かつこいいかも……」

色々な意味でイリヤにはドストライクであった。

▽▽▽

イリヤのピンチを救った謎の仮面魔法少女こと「イリヤ」は舞い上がる煙の中で、眼帯に黒を基調としたボデイコン服を纏い、鎖のついた杭のような短剣を武器とするサーヴァント・ライダーへと肉薄していた。

「眼帯を外されたら厄介。早々にケリを着けないと……」

煙が段々と晴れていく中を、小柄な体格と「ルビー」による身体強化の恩恵を最大限に活用した機動力でライダーの懐へと潜り込み、「ルビー」により平行世界から無限に流用可能な魔力と、魔力を塊として固定化するための繋ぎとして「イリヤ」自身の魔力を混ぜ込んで編みあげた二色構成の魔力弾を至近距離からその腹部へと撃ち込む。強靱な肉体を持つサーヴァントすらも爆炎が容易く吹き飛ばす。そして、高位の障壁によって「イリヤ」への被害はゼロである。

これがシングルアクションであるとは到底思いたくない威力だ。やはり魔法使いが

手掛けた礼装は基本的な仕様からして隔絶していると「イリヤ」は内心で舌を巻く。これでまだ機能の一割にも満たないというのだから尚更だ。まあ、一体どういう原理でライダーの対魔力スキルを突破できているのかは「イリヤ」にもさっぱりであるが。

それにしても、初撃による上空からの面制圧で既にかかなりの深傷を負っているのか、ありえないほど簡単に、「イリヤ」からしたら拍子抜けしてしまいうくらい綺麗に第二撃が決まってしまったものだ。

そのことに、仮面の内で怪訝な表情を浮かべた「イリヤ」は複数の魔力弾で牽制しながら一度距離を置く。

『さすイリです！物理保護障壁と魔術障壁を前提とした至近距離からの魔力弾爆散とか、思いついたところで実行する度胸なんて普通ないですよ？』

「ルビー」が大袈裟に誉め称えるも、残念ながらその賛辞はまったく別の考え事をしていった「イリヤ」の耳には届いていなかった。眉をひそめて「イリヤ」は呟く。

「弱い……?」

弱い。「イリヤ」はこのライダーを知っている。その真名をメドゥーサ。英雄というよりは反英雄と呼ばれるべき存在。両の目を覆うようにつけられた眼帯の下には石化の魔眼と呼ばれる神秘を持つ。ギリシャ神話に伝えられる、ゴルゴン三姉妹の三女にして、ステノ・エウリュアレと呼ばれる二柱の女神を姉に持つ、真正正銘の伝説の怪物。

第五次聖杯戦争においては、「イリヤ」の天敵たる間桐桜のサーヴァントとして参戦していた。故に、その能力は多少なりとも把握している。そして、「イリヤ」の持つ情報の中のライダー・メドゥーサよりも、目前のライダーの能力は、「ルビー」という強力無比な礼装の存在を考慮したところで、やはり明らかに劣っていた。

そんな「イリヤ」の思考をパスを通して拾ったのか「ルビー」が口を開いた。

『「ルビー」ちゃんはあまり露骨なネタばらしは嫌いなのですが、これに関してはひとつだけ。「イリヤ」さんたちの世界のサーヴァントと、この世界のサーヴァントとは、召喚された目的こそ同じですが、目的に到達するための課程が異なってるんですよ。故にこそ、この劣化は必然と言いますか……』

「フーン、なんかいまいちヨウリヨウを得ないけど……。まあ、いいわ。ゲームでも序盤からナゾが解けちゃったらオモシロくないし。ストーリーを進めながら気長に待ちましよう」

【イリヤ】は思考を切り替え、戦闘へと意識を引き戻す。ボロボロで、もはや満身創痍でも言うべきなライダーを瞳に捉える。

そして、「ルビー」を上段へと構えて、魔力を運用するためのイメージを固め。

「じゃあ、これで最後よ……」

天を裂くような無慈悲なる光の斬撃を振り下ろした。



手元へと降ってきたライダーのカードを、「イリヤ」は手の中で弄ぶ。「ルビー」によればこれはクラスカードと呼ばれる英霊を宿したアイテムであるらしい。

ふと、とあるアイデアが「イリヤ」の脳裏に浮かぶ。カードを触媒にきちんとした手順を踏んで英霊召喚を行えば、弱体化していない状態のサーヴァントを呼べるのではないだろうか。

大聖杯によるアシストを受けられずとも、今の「イリヤ」には「ルビー」という魔力の半永久機関が居るので魔力に不足はない。あとは、人の身で放てる魔力の出力の限界だ。召喚には一度で大量の魔力を消費することになる。出力、例えるなら水の出る蛇口の大きさの問題だ。大量の水を一度に放出するにはそれだけ大きな蛇口が必要となる。それさえなんとかなればおそらく不可能ではないだろう。

そこまで考えたところで、「イリヤ」ははたと気づく。この世界の冬木にも、もしかすると大聖杯があるのでないだろうか。仮にあるならば話は簡単だ。大聖杯自体があるのなら、魔力は此方で用意して、その召喚機能だけを借りて行使すればいい。

「イリヤ」は仮面の内で薄く笑みを浮かべ、大聖杯を探索するべく鏡面界から撤退しよう

と「ルビー」へと指示を出さんとする。が、残念ながらそれは叶わなかった。薄紫色の衣装に身を包んだ魔法少女が、「イリヤ」の後頭部へとステッキを突き付ける。

少女はその琥珀色の瞳にたしかな意思を込めて言葉を放つ。

「カードを渡してください」

「……」

突きつけられたステッキに物怖じせず「イリヤ」は振り返り、少女へと問う。

「どうしてこのカードを欲するの？」

人の獲物を横取りしようというのだからそれなりの理由はあるのだろう、と言外に「イリヤ」は言っているのだ。仮面越しに、「イリヤ」のルビーの瞳が少女の琥珀色の瞳を見据える。

「……ッ。それは……」

「イリヤ」に気圧され、一瞬たじろいだ少女だったがすぐに再び口を開いた。

「必要だから、です」

思わず脱力してしまった。答えになっていない、と「イリヤ」は苦笑する。だが、この少女はどうやらこれでも本気のようにだ。

ふむ、としばし考えるのような素振りを見せた「イリヤ」は。

「いいわ。どちらにせよ、これはわたしにはヒツヨウないもの」

そう言って少女の方へとカードを放り投げる。

カードを触媒にした英霊召喚を行いたいのはたしかであるのだが、「イリヤ」が呼び出したのは決してメデューサではないのだ。だからライダーのカードは「イリヤ」には必要ない。

放り投げられたカードを、少女が慌ててキャッチしようとする隙に突きつけたステッキを離れた隙に、「イリヤ」は今度こそ「ルビー」を使って鏡面界より跳躍した。

▽▽▽解説▽▽▽

* 騎英の手綱・ベルレフオーン

ランクにしてA+。種別は対軍宝具。騎乗できるものなら幻想種をも御し、その能力を向上させる対軍宝具。基本的にライダー・メデューサさんの仔とも言える天馬を血の魔法陣から召喚して使用する。残念なことに、イリヤさんの上空からの魔力弾グミ撃ちにより、最後まで言わせてもらえなかった。

* シングるアクション

魔力を通すだけで魔術を起動させる一工程のこと。他にも一つの事柄を自身の中で固定化する一小節、十以上の小節を以って簡易的な儀式と為す瞬間契約・テンカウントがある。

* 一体どういう原理でライダーの対魔力スキルを突破できているのかは【イリヤ】にもさっぱりであるが。

ライダーさんの対魔力はランクB。これは三小節以下の詠唱による魔術を無効化し、大魔術・儀礼呪法など大掛かりな魔術を持つても傷付けるのは困難なレベルらしい。プリヤの魔術は大体シングルアクションの気がする。宝石魔術のように何らかの媒体を使用することでほぼ一小節の詠唱でAランクの魔術行使もできるとされるが、指定がランクではなく三小節以下の詠唱による魔術なので……。これ以上は考えないようにしよう。

* 【イリヤ】の天敵たる間桐桜

聖杯の器という、同じ宿命を背負った者で、個人的には親しみを感じているが、しかし、オセロの表裏の様に決して白と黒は相容れることは出来ないらしい。

凜「あんたたちの存在って本当に魔術師泣かせよね……」

▽▽▽本編▽▽▽

円蔵山がその内部に擁する龍洞と呼ばれる大空洞。そこにはとある魔法陣が敷設されている。魔術師たちが大聖杯と称する超抜級魔術炉心。

その機能は、冬木の土地を聖杯降霊に適した霊地へと整え、且つ、冬木の霊脈を潤らさないように六十年という時間を掛けてマナを吸い上げ、聖杯戦争に必要な七騎のサーヴァントを召喚するのに十分な魔力を蓄えること。

そして、聖杯降霊の時期が近づくと「聖杯の意思」によって選ばれた、マスターに相応しい人物へと令呪が授けられ、その令呪が英霊召喚機能行使する権利となる。

「イリヤ」はライダーのサーヴァントを下したその日の内に、鏡面界を離脱したその足で龍洞へと赴いていた。

存在するだろうとは思ってはいたが、実際にこうして目の当たりにするとなんとも言

えない気分になる。大聖杯があるということはこの世界でも聖杯戦争は行われていた。否、これから先だって行われる可能性もあるということだ。

しかし、そんな「イリヤ」の曖昧な表情は仮面で隠されている。一方の「ルビー」は大聖杯を見てうむうむと唸る。

『これは……おそらく製作にはあのジジイも関わってますね〜』

「魔導元帥ゼルレッチ。アナタの生みの親よね？まあ、もつとも、元の世界ではの話だけど……」

キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ。有名な呼称は宝石翁。あるいは大師父であらうか。第二魔法とされる平行世界の運営に至った、魔術師ならもぐりでも知っているような数少ない偉大な魔法使いのひとりである。

『これは魔方陣というよりも魔術回路ですよね〜？』

「ええ。冬の聖女、ユステイーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンの魔術回路を拡張・増幅したものだとかかされているわ」

『アインツベルンといいますと……』

「私のご先祖様。正確に言えば同型機のホムンクルス、そのヒナガタよ」

「イリヤ」はそこで話を打ちきり、仮面を外して大聖杯へとゆっくりと近づいて行く。

「さて、じゃあ、さっそくジツケンを始めましょうか？」

仮面を外した「イリヤ」の顔には、とても楽しそうな笑みが浮かんでいた。

▽▽▽

「イリヤ」が去った後のことを簡潔に示せば。イリヤは美遊と、凜はルヴィアとそれぞれ邂逅を果たし一悶着あったとだけ。

鏡面界を脱出後、時間帯が時間帯だけあって、イリヤを帰宅させた凜はイリヤに着いていこうとしたルヴィアをひつつかまえて引き摺り、遠坂邸へと帰還していた。

しかし、残念ながら休息をとる暇はない。なにせ、ここに至るまで問題は山積みだ。大半は自業自得の節があるものの、目下最大の問題だけは凜の預かり知らぬところであつた。

凜はルヴィアと正面から向かい合うようにソファに腰かけて足を組み、腕を組んだ格好でなにやら不機嫌そうに眉をひそめて話を切り出した。

「ぶっ。」

『はい?』

ルヴィアは器用なことにクエスチョンマークのエフェクトを頭上に灯した。

「はい? じゃないわよ! あれば、一体、なんなわけ?」

ルビーの態度にイライラを募らせた凜は机を手の平でバンバンと叩く。

『凜さん、あれと言われましても〜？ルビーちゃんと凜さんの間には主語なしで通じ合えるほどの絆はないといえますか〜』

相変わらずふざけたような調子のルビーに凜は手近にあつたテレビのリモコンを投げつけるも、綺麗に避けられてしまう。

「あんたとの絆とか、そんなもんこつちからお願い下げよ!!そうじゃなくて、あれっていうのはあの魔法少女よ！ルヴィアのヤツが見つけてきた子はまだわかるけど、どうして」
『どうして三本目のカレイドステッキがあるのか、ですか〜？』

ルビーが真面目トーンで凜の疑問の続きを告げたことに面食らつた凜は頭から血の気が引いていくように冷静さを取り戻し、ソファに深く腰かけ直して、足を反対に組み直す。

「……わかつてるんじゃない」

『いやあく、今回ばかりはイレギュラー過ぎて流石のルビーちゃんも困惑気味なんですよね〜？』

「二応聞くけど、大師父の手掛けたステッキは三本あるの？」

『いいえ〜！あのジジイが手ずから手掛けたステッキはルビーちゃんともう一本、かわいかわいわたしの姉妹機であるサファイアちゃんだけですよ〜？』

「じゃあ、あれはなんなのよ？」

『正直言つて、ルビーちゃん自身もまだ半信半疑といえますか？』

「それでいいから教えなさい」

『……凜さんはあのジジイが魔法使いだつてことは知っていらつしやいますよね？』

「ええ、第二魔法……つてまさか………ウソ……？」

『それがホントかもしれないよ？おそらく、あのセンスの塊のような装飾のステッキさんは、平行世界から来たルビーちゃんなんです！』

「カレイドステッキつて第二魔法そのものを使えるの?!」

『少なくともルビーちゃんとサファイアちゃんに第二魔法を行使する機能はありません！ですが、試したことはありませんけど、おそらく平行世界への渡航くらいならば決して不可能ではないかと！鏡面界なんてのも言つてしまえば平行世界一歩手前なわけですからね？別に不思議ではありませんよ？』

「あんたたちの存在って本当に魔術師泣かせよね……」

「はあく頭痛い！と凜は額に手を当てて、ソファの背もたれに全体重を預けるように天井を仰いだ。」



「ううう、眠れないよ……明日も学校なのにく………」

帰宅して家族に気づかれぬようにベッドインしたものの、闘争の熱は未だ冷めず、眠気などこれっぽっちも感じられない。これは眠れない夜になりそうだといりやは諦めの念を抱いた。

仰向けになってなにもない天井を眺めながら、自身の魔法少女初日を振り返る。思い出されるのは黒紫の衣装に身を包み、綺麗な白銀の髪を風に靡かせて戦場を駆け、敵を圧倒した仮面の少女の後ろ姿。

イリヤは自分の白銀の髪を一撫でして熱の籠った溜め息を漏らした。

「かっこよかったなあ……」

それは憧憬。なあなあで魔法少女になったイリヤ。あの戦場でどうしようもできなかったイリヤ。だからこそ、あの少女の強さに憧れ焦がれてやまなかった。

「わたしも……がんばらなきゃ………」

▽▽▽

「ミュは明日から学校なのですから、睡眠は可能な限りとっておきなさい」

「はい、ルヴィアさん……」

ルヴィアに言われた通り、美遊は自室のベッドへと入ったものの、やはりというか眠れない。

目を閉じる度に、仮面から覗くあのルビーの瞳を思い出す。

「…………ツ」

気圧されはしたが、感じていたのは恐怖ではなかった。あの時に感じたのはもつと別のなにか。瞳と瞳が合った瞬間に感じた予感めいたもの。覚えのない懐かしさ。喻えるなら、そう、生まれて始めて鏡を見た時のような、そんな不思議な感覚。あの人と自分はずっと互いを理解し合える。美遊は理屈でなくそう思った。

「これは……………運命……………」

▽▽▽解説▽▽▽

*大聖杯

大聖杯を介した英霊召喚の儀式に関して調べたところ、正直よくわからなかったの
で、令呪を召喚システムを行使する権利を持つ者の証ということで捏造してみました。

* コステイーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルン

第三魔法を實現した魔法使いの弟子によつて作られた、第三魔法を再現するためのホムンクルス。魔法使いと同等か、それを上回る性能を持つていたとされる。第三魔法を使用できるものの、しかし、コストが悪く、何十年をかけて人間一人にしか使用できない。そのため生まれたのが彼女の魔術回路を分解し魔術式に置換した人体宇宙、大聖杯であるらしい。いまだ大聖杯には彼女の身体が収まつており、拡大・増幅された魔術回路は、直径一キロを越えるクレーターの表面をびっしりと覆っている。

大聖杯の炉心となつた後は人格と呼べるような機能はもう残つていないが、アイリス・フィール・フォン・アインツベルン、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンといった、後継機達との魂の繋がりが残つている。

* 【イリヤ】さんについて

小聖杯である【イリヤ】さん。聖杯戦争における優勝賞品である願望機。小聖杯は器が魔力で満ちればおおよそあらゆる願いを叶えることが可能です。つまり、【ルビー】による無限の魔力供給を利用すればいつでも奇跡を行使できるということ。ですが、それが言うほど簡単には出来ない理由があります。本来なら小聖杯とは脱落したサーヴァントの魂を魔力として納めていき、六騎分の魔力で満ちて始めて願望機として機能し、

七騎分の魔力で根源の渦へと至る孔を開くことができます。しかし、器に魔力が満ちて小聖杯に近づいていくほど、「イリヤ」さんの人としての機能が剥がれ落ちていくことになってしまうのです。つまり、小聖杯化イコール「イリヤ」さん廃人化となってしまうため、「イリヤ」さんが自ら進んで器に魔力を蓄積することはありません。

*イリヤと美遊

なんだかある意味で不穏な展開になってきた。「イリヤ」さんの受難が始まる？ 始まらない？ まあ、とりあえず “ゆるゆり” “させようか。”

「イリヤ」「よーし、ソイツ殺すわ♪」

▽▽▽本編▽▽▽

大聖杯のある龍洞を後に、帰路に着く「イリヤ」。しかし、その表情は決して明るいものではなく、ムスツと可愛く頬を膨らませている。明らかに拗ねていた。

原因は楽しみにしていた実験が出鼻を挫かれるような形で頓挫してしまったことにある。

結論から言えば、「イリヤ」の発案したクラスカードを利用した英霊召喚は夢と消えてしまったのだ。

それというのもだ、何者かが大聖杯の術式に手を入れていることがわかったのだ。散々に大聖杯への接続を試みてはみたものの、残念なことにて全てエラー。

詳しく解析すれば、大元はアインツベルンの術式で相違なかったが、要所要所のシステムが半ば強引に改竄されていた。それにより、大聖杯のシステムの大部分がひどく歪

んでしまったのだ。

それは英霊召喚システムについても例外ではなく。一応、機能はするようであるのだが、歪みが召喚に一体どのように作用するのか未知数である以上は不用意に起動することとは憚られた。

下手に藪をつついて、出てくるのが蛇ぐらいであるならば可愛いものだが、鬼が出てしまつては堪つたものではない。冷静にそう判断を下した【イリヤ】は志半ばにして実験を断念せざるを得なかつた。

結果、現在【イリヤ】は非常に不機嫌である。

「これまでのクラスカードの英霊は、どうしてか第五次聖杯戦争に呼ばれたサーヴァントたちと同じ顔ぶれだったわ……」

街灯も疎らな住宅街をとぼとぼと歩いていた【イリヤ】はくるりとスカートを翻すように振り向いて、後ろから着いてきていた【ルビー】と向き合う。

「つまり、バーサーカーは」

『ええ、狂戦士のクラスは間違いなく【イリヤ】さんが使役していたかの大英雄ヘラクレスでしょう〜!』

「わたしは、クラスカードと大聖杯を利用して、わたしのバーサーカーと感動の再会を果たすつもりだったわ」

『ええ、ええ、存じておりますとも〜!』

「ねえ、これつてつまり、わたしとバーサーカーのせつかくの再会をジャマした者が居るってことよね?とてもひどいことだとは思わない?」

『そうですね〜!ひどいですね〜?』

「そうよね?」

よーし、と明るい声音で気合いを入れながら「イリヤ」はもう一度くりと体を反転させて前を向いた。

「ソイツ殺すわ!」

唐突な「イリヤ」のガチトーンでの殺害予告に「ルビー」がすかさず突っ込みを入れる。

『え〜つと、「イリヤ」さん〜?今のアナタは魔法少女なのですから、言動にはもう少し気をつけてくださいいね〜?』

「ああ、そうだったわね。じゃあ……」

うーん、と少しばかり考えた後に「イリヤ」は満面の笑みを浮かべて台詞を紡いだ。

「この魔法少女イリヤスフィールに楯突く者は、たとえ肉親であろうとも月に代わってコロコロしちゃうぞ!」

きやるーん、などと擬音が聞こえてきそうな猫撫で声で宣言し直されたファンシーな

殺害予告。内容自体も心なしか先程よりひどくなっていた。

『ウハー！コワカワイイですね〜！【ルビー】ちゃん結構雑食ですから〜そういうのも全然アリですよ〜？』

どうやら【ルビー】としては今のは許容範囲内だったらしい。

現在時刻は午前二時過ぎ。【イリヤ】はとっくに眠気のピークを過ぎており、頭が冴え渡っている代わりに瞳は暗く濁りきり、妙なハイテンションであった。

完全に深夜のノリ、もしくは深夜テンションと呼ばれるそれである。先程からの可笑しな言動はそのためであろうか。

もともと、それは【イリヤ】に限ったの話であって、【ルビー】の方はわりかし平常運転なのだが。

▽▽▽

鏡面界での第二戦。イリヤの魔術障壁は容易く突破され、反撃に放った美遊の砲撃すらも魔力指向制御平面により弾かれ、為す術もなく撤退していくカレイドライナーたちを一瞥し、【イリヤ】は今回の敵であるローブを纏い、フードで顔を隠した女性、キャスターのサーヴァントへと目を向ける。

「流石は神代の魔女といったところね……」

ギリシヤ神話より、コルキスの王女であり裏切りの魔女。その真名はメデイア。裏切りと名のつく通り、その本質はライダー・メドゥーサ同様に反英雄。

たかが魔術師と侮ることなかれ。魔法に近いレベルの神代の超高等魔術を平然と扱い、その魔術師としての能力は魔法使いと同等、もしくは上回っているともされる。

その技量は最高位であり、キャスタークラスの英霊の中でも純粋な魔術師のキャスターとしては最強クラスの英霊。いくら狂っていて理性がなかりうと、それで甘くみてもかかれば先程の魔法少女二人の二の舞になるだけだ。

ローブを蝶の羽のように変化させて、浮遊しているキャスターの眼前へと、仮面を着けた「イリヤ」は隠行により消していた姿を現し着地する。こちらに注意を向けて警戒心を高めたキャスターへと「ルビー」を構える。

「さて、「ルビー」。今回はユダンせずに行きましようか」

『最初からクライマックスつてやつですねぇ？フルスロットルで行きましよう〜！』

先に動いたのはキャスターである。一瞬にして虚空に複数の魔方陣を展開し、弾幕の雨を降らせる。「イリヤ」もそれに対抗するように「ルビー」を振るって弾幕を張る。

撃ち漏らすことなく全てを相殺した「イリヤ」は瞬時に魔力を集束させた極大の砲撃を放つ。しかし、並みのサーヴァントであるならば一撃で掻き消せるだけの威力を有す

る魔砲でも、キャスターは容易く防ぎきってしまった。

概ね予想通りだが、出来れば今の攻撃である程度優位に立ちたかった【イリヤ】は悔しげに表情を歪める。

ライダーに使用した二色構成の爆散弾をキャスターを囲うように展開するも、反則的な転移魔術で容易に回避される。

キャスターが再び弾幕を張る。数はざっと目算したところ先程の倍。これは捌ききれないと踏んだ【イリヤ】は魔術と物理保護の二重障壁へと可能な限りの魔力を回す。

「くうっ……!?!」

ダメージは完全に殺せているが、物理保護障壁をもつてしても凄まじい衝撃が【イリヤ】の小さな体躯を襲う。

なんとか全て防ぎきった。痛みはないものの、やはり衝撃による揺れの余韻はまだ幾ばくか残っている。【イリヤ】は乱れた息を整え、【ルビー】へと声をかける。

「フウ……【ルビー】、まだいける?」

『【ルビー】ちゃんはまだまだ平気ですよ? 【イリヤ】さんこそ、大丈夫ですか?』

「ええ、問題ないわ。それとね、ひとつ試したいことがあるの。付き合ってくれるかしら?」

『当然。地獄の果てまでもつてヤツですよ? マイマスター?』

「フフツ、ありがと……」

「ルビー」と短いやりとりを交わした「イリヤ」は弾幕により巻き上がった爆煙の中を、空へと向かって飛翔した。その背中には魔力で編まれた一対の大きな翼が。

「ルビー」を振るって今度は魔力弾ではなく斬撃を放つ。翼をはためかせて空中を自由自在に飛び回りながら続けざまに斬撃を叩き込んでいく。キヤスターが魔力弾で斬撃を撃ち落としていくも、「イリヤ」はそれを想定内であるとばかりに斬撃を、今度は魔力弾と織り交ぜながらキヤスターを攪乱するように放ち、徐々に距離を縮めていく。そして。

「はぁーッ!!」

再び二色爆散弾を構成してキヤスターの懐へと飛び込んだ。しかし、キヤスターは前面のみに規模を抑えることでより強力な障壁を部分展開し、飛び込んでくる「イリヤ」を魔力砲で迎え撃つ。

だが、魔力砲が「イリヤ」に当たることはなかった。何故なら、魔力砲を前にして「イリヤ」の姿が虚空中に溶けるようにして消えてしまったからである。

次の瞬間、「イリヤ」の姿はキヤスターのすぐ背後にあった。行使したのは先程キヤスターの使用したのと同様に転移の魔術。

「イリヤ」の持つ、願望機たる小聖杯としての機能。過程を省略して結果だけを出現する

という小規模な奇跡を扱うことにより、「イリヤ」は理論を知らずとも魔力さえあれば大抵の魔術を実現することができるのだ。

つまり、「ルビー」による無限の魔力供給を受けている今の「イリヤ」はまさに水を得た魚なのである。

完全ながら空きの背後から、魔力の量と密度を高めることで更に威力の増した爆散弾を叩き込むように浴びせた。

不意の一撃を浴びて墜落していくキャスターに追い打ちをかけようとした「イリヤ」は、しかし、その手を止めた。否、止めざるを得なかった。強化された「イリヤ」の視力がその視界の端に捉えたのは黒い騎士甲冑に身を包んだ女性。

「セイバー……」

黒く輝く聖剣を携えたセイバーのサーヴァント。しかし、その姿は「イリヤ」の知るそれとはかなりかけ離れていた。

『「イリヤ」さん、差し出がましいかもしれませんが、流石に現状での二体一はやはり敵しいものがあるかと……』

「……ええ、私もそう思うわ。どうやらここは退いた方がよさそうね」

随分と距離は離れてはいるがあのセイバーの機動力ならば一瞬で戦闘に移行できる距離である。いくら弱体化しているとはいえども、前衛であるセイバーと後衛である

キャスターの組み合わせは相手取るにはまず最悪だ。「イリヤ」は渋々ながらキャスターへの追撃を諦め、セイバーを警戒しながら鏡面界より身を退いた。

▽▽▽解説▽▽▽

*深夜テンションな「イリヤ」さん

ご乱心のように。むきになって大聖杯を弄っていたら夜中になっていた。ハイテンションで言動はあれだが、殺意は本物。

*魔術師としての能力は魔法使いと同等、もしくは上回っているともされる。

奈須きのこ氏曰く、本気になったキャスターには、第五魔法の使い手である蒼崎青子ですら敵わないとのこと。

*過程を省略して結果だけを現出する

「イリヤ」さんは魔術師としての腕は未熟らしいが、小聖杯により、魔力さえあれば大抵の魔術を扱えるというチートっぷり。これは「ルビー」の無限魔力供給と組み合わせることでも色々と思いが出来そう。

*二色構成の魔力弾

ライダー戦に引き続き使用。本来なら纏まらずに霧散してしまうような膨大な量の魔力を、イリヤ自前の魔力を編み込むことで高密度まで圧縮、球形にとどめることに成功した超威力の魔力爆弾。基本、細かい制御には向いていないため牽制として放つか、接近してから至近距離で放つくらいにしか使い道はない。

*黒い騎士甲冑に身を包んだ女性

一体どこのナニトリアさんなんだ……？（棒）

凜「なんであんなに遠坂家の家訓知ってんのよ……」

▽▽▽本編▽▽▽

「イリヤ」が鏡面界内でキャスターに加えてセイバーのサーヴァントの存在を確認し、やむなく撤退を余儀なくされた翌日。

無敵であると信じてやまなかつたカレイドライナーが敗退してしまうという結果に、凜は状況を打開する戦略を練るために遠坂邸の自室にて物思いに耽っていた。

「え？なに？魔法少女って飛ぶものでしょ？」

「人は……飛べません」

空中から攻撃を仕掛けてくるキャスターへの対策としてあげられた高度な飛行の技術については、ひどく対称的な考え方をしていたイリヤと美遊の二人。言の通り、すぐに飛行のイメージを固めることが出来たイリヤであるが、一方の美遊も言の通り、非論理的であると苦言を呈しながらも、ルヴィアによる特訓で四苦八苦していた。

「神代の魔術か……」

ルビーが何気なく評したキャスターの魔術についてである。神代とは、未だ人が神と共に在った時代のこと。現代に伝わる神話の世界こそが繰り広げられていた時代である。

神秘が充ち満ちていた神代の世界の魔術師。魔術回路の質も、魔力量も、魔術師としての技術も、すべてが現代の魔術師では到底敵わない領域にあるのであろう。

こちらにはルビーとサファイアという魔法使いが手掛けた反則的なまでに高性能の魔術礼装が在る。それを考慮すればスペックだけはなんとか神代の魔術師にも及ぶだろう。

だが、逆に言えばそれだけしかないのだ。ルビーとサファイアしか対抗できるだけの手段がない。更に言えば、それを扱うのは凜よりも幼い、この前まで魔術の魔の字も知らなかったような少女たちである。

「経験の少なさがやつぱり仇になるか……。いや、でも、今更それを嘆いたところで……せめてサーヴァントに対する手札がもう少しこっちにあれば……。戦力か……」

凜は頭を振って脳内にちらついていた考えを振り払う。一瞬だけ頭に浮かんだのはライダーを圧倒した小さな紫の背中。本来なら居るはずのない三人目のカレイドライナー。

敵か味方が未だに判断しかねるような存在に頼ろうなどという考えは捨ててしまえ。そもそも、戦略に不安定で不確定な要素を組み込むべきではない。

「ダメだ。ちよつと休憩……」

凜は紅茶を入れようとキッチンへと向かう。しかし、そこには。

「あんたは……ッ」

「ごきげんよう。昨日は清々しいくらいに負けっぷりだったわね、リン？」

招かれざる来客の姿が。件の三人目の魔法少女が寛いでいた。

▽▽▽

仮面をずらし、口元だけを露にした黒紫の魔法少女は凜に淹れてもらった紅茶を一口すすった。

「……イマイチね」

「そりゃあ悪かったわね……」

米神に井形を作り頬をひくつかせながら凜も紅茶に口をつけた。そして、おそらくは認識阻害でもかけているのだろう。声も輪郭もはつきりと認識できない目の前の人物を睨む。

「それで、何のご用かしら？あの戦いを見てたんならわかるでしょうけど、私たちはキャスターとの再戦に向けて色々忙しいの。暢気にお茶会してる暇はないのよ」

「ええ、知っているわ。あの魔法少女たちが特訓と称してスカイダイブやアニメ鑑賞に興じているところを確認してるもの」

ホント、忙しそうでも何よりだわ。という「イリヤ」の皮肉に、凜は思わず口に含んでいた紅茶を嘔き出しそうになる。スカイダイブについてはルヴィアがヘリを要請していた時点で察していたが、アニメ鑑賞については完全に初耳だ。

人が散々悩んでいる時に一体何をしているのかと、凜はイリヤを問い詰めたくなった。イメージを固めるためであろうがなんであるうが、所詮娯楽は娯楽であろう。

「……で、早いところ本題に入ってくれる？」

優雅に紅茶を嗜んでいる「イリヤ」を、リンは半眼で睨みつけて話を促す。

「もう、リンはせっかちな……」

もう少し余裕を持って生きましよう、と「イリヤ」は呆れたように嘆息し、ティーカップを置いた。

「ちよつと交渉がしたいの」

「交渉？」

交渉という言葉に凜は眉をひそめる。

「今回の鏡面界に限っては、協同戦線を張らないかしら？」

「はっ、冗談。キャスターは私たちが倒すわ」

それは任務遂行者故の責任感か、はたまた魔術師としての意地か。負けっぱなしでは終われないと凜の勝ち気な瞳は語っている。世界は違えど、こういうところはやはり遠坂凜である。「イリヤ」は薄く微笑んだ。

「ええ、それでいいわ。わたしがその間にもう一体を相手してあげる」

凜は「イリヤ」の言葉の意味がすぐには呑み込めず一瞬だけ呆け、遅れて理解に至るとその眼を大きく見開いた。

「もう、一体……？」

やはりというか凜たちは知らなかったようだ。まあ、無理もないだろう。凜たちがあの鏡面界に侵入していた時間は、手酷くやられて撤退するまでのわずか数分ばかり。鏡面界内の状況を確認できるような余裕はなかったはずだ。

「そう。あの鏡面界には二体のサーヴァントが存在しているわ。一体はリンたちも戦ったキャスター。もう一体は聖剣を携えた黒い騎士甲冑のセイバー」

「ウソ……」

ひとつの鏡面界に二体のサーヴァント。事実だとすればこれまでにないケースだ。クラスカード回収任務の前任者である魔術協会の封印指定執行者からだってそのよう

な報告はなされていない。それ故に凜は「イリヤ」の言葉を簡単に鵜呑みにすることが出来ないでいた。そんな凜の態度に「イリヤ」は思わず少しムツとしてしまう。

「訊くけど、わたしにウソを吐く理由があると思うの？」

情報に対して疑ってかかるのは定石中の定石だ。魔術師であるのなら尚更。だが、仕方がないとわかってはいても、「イリヤ」としては疑われて、ない腹を探られるのはあまりいい気分ではない。

「それは……」

その問いに凜は言葉に詰まる。敵か味方かは不明。しかし、手にしたライダーのカードを容易く手放したことからクラスカードに執着があるわけではないようだ。だとすれば凜たちを出し抜くために嘘を吐くような理由はないように思われる。

だが、如何せん目的が見えてこない。それはもう不気味なほどに、この魔法少女の意図するところが不明瞭なのだ。凜の懸念はすべてそこにこそあった。しばらく頭を抱えて唸った凜は、意を決したように顔を上げた。

「……あんたの目的を教えなさい。あんたは一体何がしたくて魔法少女やってるわけ？それが聞ければ共闘案を考えてもいいわ」

「フーン、リンはわたしの正体じゃなくて、目的が知りたいんだ？」

「現状であんたの正体なんて気にしたってしょうがないじゃない？今は好奇心よりも利

益の有無よ。平行世界の魔法少女との共闘が、私たちにとって吉と出るか凶と出るか、それを見極めるのが最優先。だから、あなたの目的次第ではこの話もすべて白紙に戻すわ」

「フフツ、リンのそういう割り切ったところ、わたしは好きよ?」

「イリヤ」は仮面の内で楽しげに微笑んだ。

「それにしても、平行世界から来たことはバレてたか。まあ、「ルビー」をあからさまに見せびらかして戦っていた以上は、そっちのカレイドステッキに感づかれる可能性は考えていたけれどね……」

「ルビー」ね……。そのあなたのカレイドステッキはここに居ないのかしら?」

「ルビー」と聞いて苦い顔をしてその姿の有無を確かめるように周囲を見渡す凜。カレイドステッキ・マジカルルビーとは、ある意味で凜の天敵である。それが二本とか。もしも二本が同じ場に揃ったら、などと考えただけで頭痛がしてしまう。

「今は魔法少女二人を監視してもらってるわ。視覚共有してるからあつちの動きも見れるのよ?」

ホントに万能というか便利というか。そんな「イリヤ」の眩きに思わず頷きそうになる。性格はあれだが、その性能面に関しては何も信を置いているのだ。

「まあ、「ルビー」が居ないからと言って、わたしが戦えないわけじゃないんだけどね。魔

法少女に為れない今がチャンスだと思つて捕縛しようとしたところで、リンごときじゃわたしに勝つのはムリだと思つうけど?」

「へー、なに? 紅茶のことといい、さつきからあんた私に喧嘩売つてるの? 仕舞いにはガンドいくわよ?」

「落ち着きなさい。余裕を持つて優雅たれはどうしたのかしら?」

「なんであんたが遠坂家の家訓知ってんのよ……」

「さあ、どうしてかしらね? うーん、それで、話は半分逸れちゃったけど、わたしの目的だったかしら? そうね……強いて言えば魔法少女をやること自体が目的というか……。そもそも目的はとうに果たされていて、魔法少女として戦っているのはその対価というか……。まあ、意外と楽しんでるんだけどね」

「釈然としないわね……。なにが言いたいわけ?」

「リンはゲームとかする?」

「なによいきなり。ゲームなんてほとんどしないけど?」

「まあ、リンは機械オンチだしね」

「……ねえ、さつきから気になってただけだ。どうも私のことを知っている風に話すわよね? もしかしてあんた、二元の世界では私と知り合い?」

「黙秘するわ。ゲームするときって何を目的としてプレイすると思う?」

「黙秘する時点で肯定してるとようなものじゃない……。ゲームの目的？クリアすることじゃないの？」

「そう、その通りよ。シナリオが好きだとか世界観に浸りたいとか、ゲームをプレイする目的は多々あるけど、基本的にはクリアすることが最大の目的だと思うの。つまり、今のわたしはそんな心境なの」

「クリアすることが目的……。この状況をゲームに例えているってわけ？」

「流石にそこまで不謹慎ではないわ。あくまで似たような心境というだけよ。簡潔明瞭に表すなら、事態の終息こそがわたしの望みというわけ」

「だったら遠回りしないで率直にそう言いなさいよ」

「率直に言ったところで、はたしてリンは信じてくれたのかしらね？」

「どういう意味？」

「自分とは関係ない世界で起こっている事態を、見返りも求めず、ただ終息させたいから戦っていると言われて、リンはその裏を疑わないのかしら？」

「っ……………」

凜が再び言葉に詰まる時点で答えはわかりきっていた。

「まあ、そういうことよ。それで？協同戦線については承諾してくれるのかしら？」

「……………ええ、ええ。承諾するわよ。今回に限ってはね。流石にあの子たちだけで

サーヴァントを二体同時に相手取るのは無理だわ」

「イリヤ」はその返事を待ってましたとばかりに笑みを深め、協力者とのより良い信頼関係を築くために次の手札を切った。

「キヤスターとセイバー、その真名と能力を開示しておくわ。せいぜい有効に活用しなさい?」

▽▽▽解説▽▽▽

* 「……イマイチね」

姑感。義妹候補には少し意地悪な「イリヤ」さん。プリヤ世界の凜さんには関係ないことなのに、彼女は飛び火で被害を受けた模様。

* 「リンごときじゃわたしに勝つのはムリだと思っけど?」

Wikiでも魔術師としては未熟であるされている「イリヤ」さん。それでも素のスペックだけで凜の才能とか研鑽とか容易く捻り潰せるのはアニメUBWを見ればわかること。

*【イリヤ】とサブカルチャー

サブカルチャー大好き【イリヤ】さん。アハト翁さんが素敵で愉快的な日本の偏見を教え込んだという設定がおそらく絡んでいる。

*意外と動かしやすい凜さん

現状でイリヤや美遊よりも出番の多い凜さん。キャラとしては好きな部類であるし、とても動かしやすい。説明役とか、その他にも【イリヤ】さんと他二人の関係を繋ぐ橋渡し役になりそう。ルヴィアさんは今のところ空気。

「イリヤ」「安心しなさい。お義姉ちゃんが手ずからインドウを渡してあげるから……」

▽▽▽本編▽▽▽

「それで、これはどういうことですか？ トオサカ・リン？」

「見てわからない？ 今回は協同戦線を張るの」

明らかに不機嫌なルヴィアに対して、凜は素知らぬ顔で平然と言つてのける。

「必要ありませんわ！ ワタクシたちだけで十分戦えます！ いいえ、なんならミュヒとりでもキヤスターごときに遅れはとりません！」

「へえ、言うじゃないの。そうやって嘗めてかかってこっぴどくやられたのはどこの誰だったかしら？」

「それはアナタまでしよう！」

「ええ、そうよ。だから今回はそんなハマしない。キヤスターは私たちが倒す」

「だったら……!」

「アイツにはセイバーの相手をしてもらうのよ」

凜が離れた場所で独り夜空を見上げている黒紫の魔法少女を指差し告げる。セイバー……?とルヴィアだけでなくイリヤと美遊も首を傾げる。

「まだ不確定情報だけど、アイツが言うには鏡面界にはキャスターだけでなくセイバーも存在している、らしいわ」

「あの、凜さん。それって……」

ここで空気を読んで黙っていたイリヤが話に参加する。イリヤの言いたいことを察した凜はイリヤがすべて言い切る前に頷いて返答を返す。

「アイツも鏡面界で一度、キャスターと戦ってるのよ。詳細は知らないけど、セイバーが現れたことで撤退を余儀なくされたって言うてたし、ライダーとの戦闘を加味して、セイバーの存在がなければアイツがキャスターを打倒できていた可能性は高いわ」

「ほええ……やつぱり、スゴいなあ」

イリヤは横目で三人目を流し見る。強いとは理解していたが、自分たちが手も足も出なかったキャスターとだって渡り合える少女を、イリヤは純粹にスゴいと思った。

「……」

美遊も美遊で第三のカレイドライナーを呆つと見つめている。

「事情は理解しましたわ。百歩譲ってセイバーの存在が事実だったとして、彼女は本当にキャスターには手を出さないのでですか？」

「そこは問題ないわ。なんせセルフ・ギアス・スクロールを使ったもの」

セルフ・ギアス・スクロールとは、魔術師にとつて絶対順守の法であり、署名した者の魂を縛る強力な術式。これに記された契約に同意した場合、それを破ることは如何なる者にも叶わず、その効力から逃れる術はないという。その契約内容は

今回に限りセイバーのサーヴァント以外には手を出さないこと。

当然、セルフ・ギアス・スクロールは値の張る代物である。安い買い物であつたとは思わない。だが、任務の成功のためにはそれを使うだけの価値があると凛は判断したのだ。

「しかし、セイバーのクラスカードをあちらにとられれば任務は……」

「だから、キャスターなんてきつさと倒して、アイツに加勢。セイバーのカードもかっさらうのよ。契約でアイツはセイバー以外には手を出せない。つまり、私たちにも手を出せないんだから」

「なるほど、だからセルフ・ギアス・スクロールを……。アナタを褒めるのは少しばかり癪ですが、いいアイデアですわね！」

「……」

『いい大人が、なんと情けない……』

「凜さん、悪い顔だよ……」

『性格が悪いというか、今のリンさんはまるで悪魔のようですね？』

「赤い悪魔、だね」

美遊とサファイア、イリヤとルビーの刺すような冷たい視線に、しかし、凜とルヴィアは気づかなかった。

▽▽▽

「ハア……アホらしいわ」

『たしかに、なにやら抜けたところのある方々ですね？』

嘆息した「イリヤ」は「ルビー」の羽をそつと撫でて空を見上げる。そこには満天の星空……などではなく、雲に覆われて月すらもその姿を隠した空が広がる。

「あの黒髪の魔法少女……」

『ミュさんとかいう方ですか？』

「そう。この前からなにか違和感というか思うところがあつたんだけど、どこかサクラと同じような……ううん、サクラともわたしとも違う。けど、似てる……。親近感を憶

えるわ」

もしかして、彼女は……。そこまで言つて「イリヤ」は口をつぐんだ。背後から近づいてくる気配に気づいたからだ。

「あ、あの……」

振り向けばそこには転身を終えたイリヤがルビーを携えて立っていた。「イリヤ」は仮面と認識疎外を確認してから声を発する。

「なにかしら？」

「えーと……ミーティングが終わったので、呼んで来いって凜さんが……」

「……そう。でも、協同戦線とはいえ行動を共にする気はないわ。リンに伝えておいて、アナタたちがキャスターを倒してしまいう前に、わたしがセイバーを倒してあげる、って……」

「アハハ……さっきの聴こえてたんだ……。あ、でもでも！あんな人だけ頼りに
はなるんだよ！」

申し訳なさそうにしていたイリヤは、次に凜のフォローに入るが、なんとわかわた
わたと慌てたようにしていて怪しいし、どこか投げやりだ。

「……多分」

「……ハア」

なんかもう見ていられなくなった【イリヤ】は二度目の嘆息と共に鏡面界へと跳躍する。

「た、溜め息吐かれた……」

後にはガクツと項垂れるイリヤだけが取り残されたのだった。

▽▽▽

セイバーの姿を探し回りながら【イリヤ】と【ルビー】は雑談に興じる。

『アナタがミュさんを気にしているように、ミュさんの方もアナタのことが気になっているようでしたね〜?』

「……どうして楽しそうなの、【ルビー】?」

『それは【イリヤ】さんと居ると楽しいことが尽きないからですよ〜!』

「フーン……おっと、居たわね」

【ルビー】の言葉がどこか含みがあるように感じられて腑に落ちないが、それを問いただす前に【イリヤ】はお目当てのセイバーを発見した。

ただ佇んでいるというだけで、黒い騎士王は圧倒的な存在感を放っている。明らかに変質してしまっているセイバーに【イリヤ】は仮面の内で眉をひそめた。違うと頭で理

解していても、どうしても、目の前のセイバーを義妹候補の彼女と重ねてしまう。

「随分と才ちたものね、セイバー？安心しなさい。お義姉ちゃんが手ずからインドウを渡してあげるから……」

【イリヤ】は仮面を外して投げ捨てる。

「いくわよ【ルビー】？タイムリミットはリンたちがキャスターを倒すまで。シッパイした時のペナルティはわたしの身バレってことで」

『いいですね〜！ペナルティを自らに課すなんて、【イリヤ】さんは本当にストイックですよー！』

「だって、ただ戦うだけじゃあつまらないでしょう？」

不敵に微笑む【イリヤ】は【ルビー】を構えて魔力弾を放つ。それが開戦の合図となり、魔力弾を黒の聖剣で真つ二つに切り裂いたセイバーが魔力放出による高速移動で【イリヤ】との距離を詰めに来る。その様はまるで人間ロケットのようである。

【イリヤ】は転移魔術でセイバーの背後をとるも、こちらが見えていない筈のセイバーは急停止して【イリヤ】の居る背後へと聖剣を振るう。しまったと思ったのも束の間、障壁と聖剣が衝突し、発生した衝撃波に【イリヤ】は吹き飛ばされる。

「つたあ……。やっぱり通じなかった」

というのも、今しがた行った攻撃パターンはつい先日キャスター相手に使用した転

移による奇襲そのものである。

唐突なカミングアウトではあるが、そもそもアインツベルンとは戦闘を苦手とする一族である。その理由は戦術面での問題が大きいとされる。その典型こそがヘラクレスをバーサーカークラスで召喚した第五次聖杯戦争であろう。

アハト翁の、強いマスターを使って強い英雄を一番強い状態で召喚すれば勝てるのは、という安直な考えが「イリヤ」とバーサーカーのコンビを生み、更にはまともな作戦もなしにただただ好き勝手に暴れさせるだけという脳筋のような戦術の欠片もない戦法を生んだのだ。

実際、これまでの「イリヤ」においても「ルビー」の火力に頼った単調なごり押し戦闘しか行ってきたていない。よしんば「イリヤ」と「ルビー」そのもののスペックが凶悪なだけにそれでも戦えていたし、勝っていた。誰もが強いと思わせられていたのだ。

しかし、ここに来て張りぼてがとれかかってしまっている。それだけセイバーはこと戦うということに関しては「イリヤ」のどこまでも先を行っていた。

「イリヤ」はセイバーの周囲に複数の魔方陣を展開させる。

「喰らいなさいっ！」

全方位面制圧弾幕。四方八方上下から隙間などないほどの魔力弾の雨が降る。完全不可避攻撃。まさに鬼畜的である。その分魔力消費は半端ではないが「ルビー」の恩恵

のおかげでこのような無茶苦茶な攻撃も可能となる。

「……ダメか」

土煙が晴れる。そこには攻撃をまともに受けて尚、悠々と足を地につけて立っているセイバーの姿。ある程度ダメージは入ってくれたようだが、それでも疲弊した様子はない。

『やつぱり腐つても騎士王ですか〜！正直、今の攻撃は完全に決まったと思っただんです
がね〜？』

「気を引き締めなさい【ルビー】。来るわ」

セイバーが聖剣を構え、その刀身へと黒い魔力が収束していく。それは約束された勝利の剣・エクスカリバーの真名解放。すべてを呑み込む黒き光の大河。【イリヤ】はその綺麗な顔を苦し気に歪ませた。

▽▽▽解説▽▽▽

*セルフ・ギアス・スクロールで【イリヤ】さんを嵌めたつもりの凜さん。

流石凜さん汚い。尚、【イリヤ】さんは最初からセイバー以外に手を出す気はなく、クラスカードも欲していないので、実際には凜さんが無駄な出費をしただけの模様。

* 『それは「イリヤ」さんと居ると楽しいことが尽きないからですよ〜!』

【ルビー】 ちゃんはどうなカップリングでも有りですよ〜? ということらしい。作者的にもそういうシーンを書きたいが、正直、無印プリヤ篇では書けそうにない。ツヴァイとドライを書く予定が今のところないため番外編という形で書くことになるかもしれない。

* 「お義姉ちゃんが手ずからインドウを渡してあげるから……」

セイバーを思つての発言に聞こえなくもないが、内心では別人といえど義弟を狙う義妹候補を大手を振つてボコ……いびれるということでもちよつとテンションアップしている【イリヤ】さん。

* アインツベルンは戦闘を苦手とする一族

アハト翁ことユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンが聖杯戦争に向けて整えた、切嗣とアルトリア、イリヤとヘラクレスの組み合わせの例でわかる通り、強いマスターと強いサーヴァントを組み合わせればすごく強いはず、という至極単純な発想しかでない。強者と勝者はイコールではないという戦場の基本も弁えていないあたりが、アイ

ンツベルンを象徴しているともいえる。アインツベルンが「戦闘を苦手とする」と言われるのは単なるマスターの戦闘力などの問題より、こういった戦術面での問題が大きいとされる。

美遊「あの人なら心配ないと思う、けど……………」

▽▽▽本編▽▽▽

「イリヤ」とセイバーが戦っている一方で、イリヤと美遊のキャスター戦も熾烈を極めていた。

空を自在に飛び回り攻撃を行うイリヤと、飛行こそ身につけられなかったものの、魔力で足場を構築して空中を駆けるという発想の転換でキャスターと戦うための手段を手にした美遊は前回からして明らかに成長を遂げていた。

「この前より動きが鈍いですわね……」

「アイツとの戦闘のダメージが抜けきつてないみたいね。好都合だわ」

今回は完全にサポートに回っているルヴィアと凜は緊張感からか手の内で宝石を弄りながら二人のカレイドライナーの戦いを見守る。

『イリヤさん！威力は低くて構いません！とにかく遠距離から撃ちまくってキャスター』

の気を引いてください！」

「低威力で…………散弾、弾幕……………」

ぶつぶつと呟きながら脳内でシミュレートを繰り返すイリヤの脳裏に浮かんだ光景は、仮面の魔法少女が放ったライダーを押し潰さんばかりの魔力弾の雨とそれに伴って巻き起こった超威力の爆発。

あつ、と気づいた時にはイリヤはルビーを振るっていた。放たれるのは低威力の散弾、などではなく一発一発が高い密度で圧縮された魔力弾の嵐。

広域に張られたそれは、キャスターの転移の魔術を封じると同時に確実にキャスターのヘイトをイリヤへと集めることに成功した。

「なんてバカ魔力よ……………」

「凄まじいですわね。ついこの前まで魔術の魔の字も知らなかったとは思えない魔力コントロールですわ……………」

イリヤの天性のセンスに呆れ返る凜とルヴィア。美遊も眼前で起こった出来事に驚きを隠せずに目を見開いた。しかし、それも束の間。予想外のことではあったが、それでも冷静にチャンス逃すまいと行動を次に移す。

「ランサー……………限定召喚」

クラスカードより、英霊の切り札たる宝具のみを限定的に召喚する。それは紅の槍。

心臓を喰らうモノ。因果逆転を生じる権能に等しき呪いを内包した魔槍。

「刺し穿つ……」

強化された身体能力で足場を蹴ってキャスターの背後へと一瞬で迫る。キャスターが此方に気づくも、宝具を発動させた今となつては既に後の祭である。何故なら、これは心臓を貫いたという結果を作ってから槍を放っているのだから。

「死棘の槍ッ!!」

美遊の放った槍は寸分の狂いもなく、キャスターの心臓を穿ち貫いた。

手元へと降ってきたキャスターのクラスカードを見つめていた美遊にイリヤが近づきながら声をかける。

「やったね! ミュさん!」

「イリヤスフィール……さっきのは」

「勝利の余韻に浸ってる暇はないわよ二人とも! さっきとアイツの加勢に行く!」

美遊が何かを言いかけるが、凜の言葉によって遮られる。

「そ、そうだった! あの人を助けに行かなきゃ!」

「あの人なら心配ないと思う、けど……」

目に見えて慌てるイリヤと、言葉とは裏腹に魔力が揺れている方向を気にする美遊。

そして同じように凜とルヴィアも険しい顔で二色の光が柱のように天へと昇る様を見

ていた。

▽▽▽

圧倒的質量で迫る黒い光の大河を前にして、「イリヤ」は自らの内の恐怖感情を自覚しながら、それでも冷静さを欠かない。

転移魔術を行使すればセイバーの一撃を避けることぐらい容易である。だが、それはダメなのだ。「イリヤ」は逃げの一手を選択肢から除外する。

ここで逃げたら義姉としての威厳が廃るといふもの。義妹のすべてを受け止めてこそその義姉であろう。常ならば不可能であるが、今の自分にはそれを為すだけの力がある。

「マスター権限により、凍結していた一部機能を解凍。使用許可を申請」

『了解しました〜！申請を受理、限定的な第二魔法の行使を許可します〜！』

限定的な第二魔法の行使とは。

宝石剣ゼルレッチというものがある。刀身が宝石で作られた棍棒のような見た目の剣で、その名前からわかるように魔導元帥ゼルレッチが生み出し、自身の名をつけた、限定的ながらも第二魔法を行使することが可能な魔術礼装。

その能力は使用した空間に平行世界へと繋がる小さな穴を穿ち、大気中のマナを採取。無限にある平行世界からマナ供給を得る事で光の斬撃を無限に放つというもの。その威力はサーヴァントの宝具六発分を裕に越えて未知数である。

つまり、限定的な第二魔法の行使とはこれと同様の力を引き出せることと同義である。

これまで魔力供給という形で己の内世界にしか影響を与えなかった平行世界からの魔力の流用を、外世界へと影響を与えるようにシフトする。オドではなくマナへの干渉。それはひどく繊細で緻密なコントロールセンスを要する技である。

しかし、「イリヤ」の場合は足りない経験や技量の方は「ルビー」による補助と小聖杯の能力で補って余りある。故に、理論を無視して感覚のみで扱えるのだ。

「イツ……けエツ!!」

「イリヤ」が「ルビー」を振るった。魔力斬撃とは比べ物にならないほど膨大な魔力による七色の光の斬撃が黒き光と衝突し、拮抗する。黒と虹の光が天へと昇る。

「ハア……ハア………ッ」

一発放つただけで「イリヤ」は息も切れ切れである。やはりというか体力と精神力の消耗が激しい。全力で放たずとも聖剣の一撃と相殺するだけの威力は凄まじいの一言であるが、逆に言えば全力で放っていないというのに満身創痍の如く体力を消費してし

まうのだから、仮に全力で放てたとしても倒れてしまうのが目に見えている。

これはとんだ諸刃の剣だと「イリヤ」は思う。無限に放てるとは言っても、それは体力が続く限りの話なのだろう。元よりメリット相応のデメリットは覚悟の上であったし、寧ろデメリットとしてはまだ軽く済んでいる方である。

『「イリヤ」さん！どうやら相手さんは休ませてくれる気はないようですよ？』

「ええ……………そう、みたいねッ」

大技を放った直後とは思えないほど軽やかな動きでセイバーは「イリヤ」へと肉薄する。振るわれた聖剣が棒立ちの「イリヤ」を襲う。しかし、聖剣は「イリヤ」が展開した守護障壁に容易く弾かれた。それを見て、「イリヤ」は息を切らしながら余裕綽々の笑みを浮かべてフフツと声を漏らした。

「流石に、この障壁はツ……………抜けないでしょう？」

現在、「イリヤ」が展開している守護障壁は従来の物理保護障壁とは最早別物の域にある。それは物理指向制御平面術式を組み込み、障壁に物理的に触れた物の有向量を逸らすことができる障壁。キャスター戦で目にした魔力指向制御平面の術式の応用技術。

本当に咄嗟の咄嗟に思いついたものだが、これならセイバーとの接近戦だつて行えてしまいそうだ。

「ハア……………大分落ち着いたわ」

宝具に続いて聖剣を防がれて警戒しているのか、此方の出方を伺うように佇むセイバーを息を整え終えた「イリヤ」は見据える。

「じゃあ【ルビー】、もう一発いくわよ」

『連続使用はあまりオススメしません？おそらく次は全開で撃たなくても倒れちゃいますよー！』

「でも、それ以外に有効なダメージを与える手立てがない。魔力弾で少しずつケズったところでジリ貧よ。いくら障壁が強固な守りでも、持久戦ともなれば不利になるのはサーヴァントと違って生身の人間でしかないコツチなんだから……」

【ルビー】を構えた「イリヤ」の次の行動を阻害せんとセイバーが動いた。弾かれることを承知で障壁へと聖剣を叩きつける。

一瞬にして障壁にかなりの魔力を持っていかれる感覚に【イリヤ】は顔を歪めた。しかし、衝突による衝撃すらも逸らす堅牢な守りは【イリヤ】の体勢すらも崩すことは敵わず、逆に【イリヤ】にとっては絶好のチャンスとなる。

「ハアアアアッ!!」

【イリヤ】はそのまま何も迷うことなく【ルビー】を振り抜く。行使される第二魔法の力の一端。七色の光の斬撃が至近距離で放たれた。

消し飛んでいくセイバーの姿を認めながら、体から力が抜けていく。【イリヤ】は遠の

く意識を必死に手繰り寄せようとするが。

「あつ、ヤバ……………」

▽▽▽

キャスターを倒し、加勢へと飛んだイリヤと美遊が到着した先で見たものは、七色の光の斬撃で消し飛ばされるセイバーと、倒れ行く黒紫の衣装に身を包んだ銀髪紅眼の少女の姿。

「あれ？へ…………？」

『これは……………』

『一体どういうことなのでしょう？』

目の前の光景に困惑するイリヤ。ルビーとサファイアも例外ではない。無論。

「イリヤスフィールが、二人…………？」

それは美遊もである。

固まってしまった二人と二機の前で、宙を舞っていたセイバーのクラスカードが地面へと落ちた。

▽▽▽解説▽▽▽

*宝石剣ゼルレツチ

H F ルートで無限の魔力を得た間桐桜とセイバーオルタに対抗する為に凜が士郎に投影させて作り上げた。その威力は凄まじく、セイバーのエクスカリバーには及ばないものかなり出力を誇る。wikiではエクスカリバーにかけて小カリバーと称されていた。

作中では凜対桜の姉妹対決に使用され、桜が使役していた、一体一体がサーヴァントの宝具にも匹敵する影の巨人に対抗する為に使用し、それを六体程纏めて葬るというチート性能を見せつけた。

作中では使用することに腕の筋繊維が一本一本切断されていくというデメリットがあったが、コレは凜が使用した宝石剣が士郎が作り上げた不完全な投影品であるが故の欠陥なのか、それともオリジナルにもこの弱点があるか、はたまた凜の細腕が原因なのかどうかは不明らしい。

今回、登場したのは「ルビー」の機能のひとつであり、正確にはまったく同じものというわけではないが術式そのものに大きな違いはない。デメリットは体力やら精神力やらをゴリゴリ削られること。投影品の宝石剣の威力がサーヴァントの宝具六発分な

ので、本物であった場合の威力は未知数だろうということ、とりあえずセイバーのエクスカリバーと相殺させることとした。

*物理指向制御平面術式

キヤスターが使用した魔力指向制御平面の術式を対物理へと応用させたもの。障壁に物理的に触れた物の有向量の指向を制御して逸らすことができる。有向量とは簡単に言えばベクトルのこと。これを反映した物理保護障壁は隔絶した防御力を誇るものの、魔力消費が激しく常時展開は不可能。

*漂うパワーインフレ臭

今回だけで「イリヤ」さんTUEEEEE!!が急加速した気がするが、ドライとか見るとこれでもまだまだ弱い気がする。強くしなきゃ（使命感！）

*イリヤさんの覚醒イベが……

クログエが生まれるために必要なセイバー戦での覚醒イベントはとりあえずバーサーカー戦へと引き延ばしに。

*倒れた「イリヤ」さん

身バレフラグ回収完了。次回からまともにプリヤ勢と絡めると思う。

【イリヤ】「甘いわね。そういうの、心の贅肉なんじゃな
かった?」

▽▽▽本編▽▽▽

ホムンクルスとは。

ホムンクルスとは、総じて短命である。

最強のマスターとして作られた【イリヤ】とてその例に漏れない。寧ろ、母親の胎内に居る内から様々な呪的処理を施されてきた弊害故に、その命はホムンクルスの通常個体より更に短いものとなってしまっている。そこに人の身には過ぎた力である【イリヤ】の内の小聖杯の存在が拍車をかけて、第五次聖杯戦争を無事終えたところで、その命はあと数年のものとされていた。

無論、調整を行いさえすれば一時的な延命措置にはなる。しかし、アインツベルン製のホムンクルスほどの代物を調整をすることが可能な人物は、その製作者であるアハト

翁ことユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンを除けば例外は世界に然程居ないだろう。それこそ現在は所在不明な封印指定を受けたあの最高の人形師くらいのものである。

そもそも、元々アハト翁は第五次を持つて聖杯戦争を利用した第三魔法への到達を断念するつもりで居た。そうでなくても大聖杯が破壊された今、アハト翁には「イリヤスフィール」という小聖杯を調整する理由がない。つまり。

つまり、実質「イリヤ」の寿命はあと数年かそこら、聖杯戦争が終決して約二年の月日が流れた今となつては本当にあと幾ばくかの命であろう。もしかしたら、明日明後日すらも危ういやも知れぬ命であつた。

「セラ」がゲームコントローラーを握りしめてテレビ画面にかじりついている「イリヤ」へと声をかける。

「本当に、よろしいのですか？」

「くどいわ。何度も言わせないで。【シロウ】にはヒミツよ」

淡々と言い切つた「イリヤ」に今度は「リス」が。

「でも、【シロウ】なら……」

なんとかかしてくれるかも……。【イリヤ】はその先を聴かずとも察した。ああ、そうだろう。【衛宮士郎】という青年なら、近頃は更に男らしさに磨きがかかつてきて時計塔の

お堅い魔術師の少女たちでさえ無自覚の内に恋する乙女に変えてしまう、あの天然ジゴ口ならばどうにかしてくれるかもしれない。

あの「セラ」も言葉にこそしないものの、「士郎」に信を置いている。なんの根拠もないのに、不思議と信じてしまいそうになる辺り、既に自分たちも相当に「士郎」のことを好んでいるのかもしれない。

——でもね、「リズ」……。

【イリヤ】はゲームの画面を一時停止させて【リズ】の瞳を真つ直ぐと見つめた。

「シロウの夢の邪魔はしたくないの」

それは【イリヤ】の思い。

「ようやく自分の道を歩き始めたんだから。わたしは、その邪魔にはなりたくない」

義姉だから、義弟の夢の妨げにはなりたくないのだという強い思い。

本当は死ぬのが怖い、これから先も【士郎】たちと一緒に生きて、未来を共に歩いて行きたい。【セイバー】か【凜】どちらかの晴れ姿を見なければならぬかもしれないのは少々癪だが、きつとその未来では【士郎】は笑っている。ならばそれ以上はきつとない。

本心を言えば、他ならぬ【士郎】に助けて欲しい。悲劇のヒロインのようにヒーローに救われたい。助けて、と言えたらどれだけ楽だろうか。心から叫びたい。助けを乞い

たい。

だが、「イリヤ」は。

「だから、シロウにはナイシヨよ?」

シートと人指し指を唇に当てて儂げに微笑む「イリヤ」に、その覚悟の程を察した「セラ」と「リズ」はこれ以上を押し黙る他ない。

「それにね、ただで死んであげる気もないのよ? 醜くても、最後まで足掻くわ。簡単に諦めちゃったら、それこそ義弟に合わせる顔がないもの」

これは「イリヤ」が「ルビー」に出会う少し前のお話。

魔法少女の物語の前日譚。

願いの欠片。

力の源泉。

▽▽▽

懐かしい夢を見ていた気がするが、案の定その内容は思い出せない。重たい目蓋を持ち上げれば、そこには見覚えのない天井が広がっていて、見たくもない顔が視界に入った。

「あら? お目覚め? ご機嫌はいかががしら?」

「……………ええ、そうね。寝起きでアナタの顔を見なきやだなんて、とつてもサイアクだわ」

「コイツウ…………ツ」

起きて早々にもう一度眠らせてやろうかと凜は米神に井形を作る。

【イリヤ】はしばし記憶を辿り、現状を理解したのか深く嘆息した。ああ、結局自分は倒れたのか。

あれだけ消耗の激しい技をそう時間も置かずに連続して使えば当然いずれは倒れるだろうと思っただけだが、まさかあの場で倒れてしまうとは。

懸念がなかったと言えば嘘になるが、鏡面界から脱出するだけの気力は残るだろうと高を括っていた結果がこれである。

今の【イリヤ】は仮面どころか認識障害すら発動させていない。セイバーはきつちり倒したというのに身バレのペナルティーを受けることになろうとは、迂闊であるとしたか言い様がない。

寝かされていたベッドから身体を起こした【イリヤ】は自らの体を解析する。魔術回路、神経系その他諸々異常なし。オールクリア。

「拘束……………しないんだ?」

「アンタ、私をなんだと思ってるわけ？ 敵対関係どころか協力関係を結んだ相手を拘束とかするわけじゃない」

手枷も足枷も呪的縛りもない状況に疑問の声をあげた【イリヤ】に凜はあつけらかなと答える。

「甘いわね。そういうの、心の贅肉なんじゃなかった？」

「だから、なんでアンタは……って、その容姿でなんとなく察したけど……」

そして、凜は先程までとは打って変わってニヤツと擬音が聴こえてきそうな笑みを浮かべる。

「ねえ、平行世界の【イリヤ】？ 色々とお話を聞かせてくれるかしら？」

瞳には好奇の色。魔術師の性である知的探求心とほんの少しのミーハー精神。【イリヤ】は再び嘆息する。

「ひとつ言っておくわ。わたしこう見えても数え年で二十歳よ。言葉使いには気をつけないよ」

▽▽▽

凜と【イリヤ】が遠坂邸の寝室で改めて顔を合わせていたその時。一方で遠坂邸のり

ビングどはルビーと「ルビー」が睨み合っていた。

「ちよつと、ルビー!ステイ!ステイ!」

『止めないでくださいイリヤさん!自分自身と戦えるなんて燃える展開!この機会を逃すわけにはいきません!』

「そんな機会は永遠に來なくていいから!」

『「ルビー」ちゃんとしては楽しそうですし、乗っけてあげても構いませんよ?』

「そつちも乗らなくていいから!」

自分とまつたくの瓜二つの存在により受けた衝撃の余韻に浸っている暇などないとばかりに、イリヤが振り回されて右往左往する様を、少し離れた所から見ている美遊はそれだけでげんなりした気分になっていた。

「これは……想像以上」

イリヤは本当によくやっているとと思う。あの渦中に自分が居たらと想像しただけで気が滅入りそうな美遊である。ルヴィアも、それどころかサファイアすらもそれには内心で同意した。あそこに居るのが自分でなくてよかった、と。

「それにしても、世界間移動とは……第二魔法とはやはり凄まじいものですわね。これが根源に到達した力の一端とは……。人の理解の範疇を越えていますわ」

『概ね同意します。平行世界のカレイドステッキの性能は、第二魔法そのものを扱える

というだけで、わたしたちのそれを遥かに凌駕している……」

おそらく、ステッキ単体でもその性能に陰りはないだろう。逆に捉えれば、マスターを持たない方がその力を十全に奮えるのではないだろうか。では、あの少女がマスターである意味とは。

そこまで思考してサファイアはたと気づく。「ルビー」とルビーが同一の存在であるならばその思考をトレースしようとするだけ無駄であると。愉悦的で娯楽主義のアレに深い意味を求めてはいけない。

『……………ですがきつと、酷いことにはならないでしょう』

そこら辺はきちんと弁えている筈だ。

「サファイア、なにか言った？」

『いいえ。なんでもありませんよ、美遊様？』

そうして、夏の夜は更けていく。

▽▽▽解説▽▽▽

*ホムンクルスと短命

「イリヤ」の叫びと願いの一端。一応は重要なフアクターだが、そんな深く気にする必要

性はないので気軽に読んでいただきたい。

*封印指定を受けた最高の人形師

蒼崎橙子さん。空の境界の登場人物の一人であり、魔法使いの夜のヒロインで第五魔法・青を司る蒼崎青子の姉。姉妹仲は悪いを通り越して最悪らしい。出番はない。

*「シロウの夢の邪魔はしたくないの」

迷惑とは言わない。【土郎】くんはきつと迷惑だとは思わないだろう。だからこれはある意味で【イリヤ】さんの我儘なのだ。カッコよく描写できただろうか……。

*心の贅肉

原作にて凜が時々口にする謎の言葉。なんとなく言わんとするところはわかるが、やはりどこことなく不思議な言い回し。ちなみにあくまで”心の”贅肉であり、本当に贅肉があるみたいな事を言ったらガンダが飛ぶ。

*「ひとつ言っておくわ。わたしこう見えても数え年で二十歳よ。言葉使いには気をつけなさい」

この作品のタイトルにも入っている魔法少女の少女の部分を根幹から揺るがし兼ねない台詞。実際のところ「イリヤ」さんは肉体が成長しないだけで、ZEROの時点で八歳、その十年後のSNの時点で十八歳、そこから一年半後のお話であるこの作品では十九歳と半年で数えて二十歳である。つまり、「イリヤ」さんは合法。

*ルビーと「ルビー」に振り回されるイリヤちゃん

ご愁傷様としか言い様がない。サファイアですら渦中に巻き込まれるのをおそれる始末。イリヤちゃんの明日はどっちだ。

*少し不穏な雰囲気のスファイアだが……

「ルビー」ちゃんの考えは他ならぬ「ルビー」ちゃんのみが知るということを強調したかっただけで、これがフラグで何か事態が急変するような出来事が起こる……予定は今のところない。

番外編

— 冬木のホワイトクリスマス — 【イリヤ】「だ、大丈夫……これは、カップラーメンじゃないから」

元の世界にて、時計塔より一時帰還した【士郎】と【セイバー】、ついでに【凜】を伴いクリスマスに年末年始とゆるりと過ごした【イリヤ】。勿論、【桜】や【大河】も、【セラ】に【リス】も忘れてはいない。大所帯で過ごした時間はとても温かいものだった。そんな【イリヤ】は現在……

「やっぱり慣れないわね。この視点の高さ……」

『ヴィヴィッドでストライクな大人モード〜！本編に大分先駆けての登場ですがどうせ番外編なんですから気にせずやっちゃいましょう〜！』

「ゴメン、【ルビー】。後半ちよつとナニ言ってるか分からないわ」

相変わらず壊れたブレーキでトップギアを入れる平常運転な【ルビー】の危ない発言

を適当に受け流し、イルミネーションが咲き乱れる街中を歩く「イリヤ」。世界線のズレによる微妙な時間の差異のために二度目のクリスマスである。

しかし、「イリヤ」の背丈は何時もより高く、顔立ちや体つきも普段より大人らしい、年齢相応の容姿であった。

何故に、十代前半程で成長が止まっていた合法ロリの「イリヤ」がこのような姿をしているのかといえば、勿論、それは現在、「イリヤ」の羽織る黒紫のダツフルコートの内側、胸元でブローチに擬態している「ルビー」のソレな力でアレやコレやなわけであつて……。

『細かい事はいいんですよ〜！さきつ、折角なので楽しみましょうー！』

「ハア……本当に、「ルビー」と居るとタイクツしないわ」

通常より一割程テンションがアゲアゲしている「ルビー」に皮肉を吐きながら、「イリヤ」の頬も自然と緩んでしまっている。不思議なことに “ 楽しい ” は伝染する。両方ともクリスマスの雰囲気につきり当てられてしまっていた。

「ねえ、「ルビー」、服でも見に行きましようか？この姿なら普段は着れないような服も着れるだろうし」

『いいですね〜！じゃあ、そのあとは何か美味しいものでも食べに行きましようー！』

「いいけど、アナタは食べられないでしょ？」

『食べられるようになる方法もありますが、「ルビー」ちゃんは今回は雰囲気を楽しむことにします!』

そういうことらしい。「ルビー」がそれでいいならばいいかと「イリヤ」はシヨツピングモールへと足を向ける。途中、ミニスカヘソ出しサンタコスでティツシユ配りをしてる封印指定執行者が居た気がしなくもないが見なかつたことにした。

▽▽▽

「アイリさん……?」

ブティックを物色し、ウィンドウショッピングを謳歌しながら適当なレストランを探していた「イリヤ」は、後ろからかけられたどこかで聞き覚えのある声に考える間もなく振り向く。

そこには赤銅色の髪に琥珀色の瞳をした少年が驚いたような表情で立ち尽くしていた。「イリヤ」の知るところよりも体格も顔立ちも纏う雰囲気もかなり幼いが、見間違えるはずがない。

「あれ?イリヤ……でもない……?」

あれ?人違いか……?と戸惑うように視線を右往左往させる少年の名は衛宮士郎。

向こうでは「イリヤ」の義弟であり、こちらではイリヤの義兄である人物。

「イリヤ」も少しばかり驚いたように目を見開いたものの、すぐに微笑を浮かべて士郎へと話しかける。

「ごきげんよう。何かご用かしら？」

「ああ、いや、すいません。人違いでした。知っている人に似ていたものですから」

「ふうん、そんなに似てるのかしら？」

「はい。あつ、いや、雰囲気は全然違うんですけど……。あの人はもっとアレっぽいとい
うか……………」

アレっぽい…………アレっぽい…………。義理の息子にアレっぽいと言われる母親つて
……。誰と間違えられたのか何となしに察していた「イリヤ」は士郎の返答に何とも言
えない気分になる。

「…………そう。ねえ、アナタのお名前は？」

「衛宮士郎です」

「そっかあ、シロウかあ…………」

凜とか桜とかセイバーとか、周囲に女の子ばかりの環境が続いたためか、「士郎」は妙
に女馴れしてしまい、今では最初の頃のような初な反応が少なくなってしまった。だか
らというか、だからこそというか、「イリヤ」から見てこちらのとてもあたふたと受け答

えをする士郎は……

「カワイイかも……」

【イリヤ】は誰にも聞こえないくらいの小さな声でそう呟いた。いじめ甲斐もとい、とてもからかい甲斐があるではないか。

雪の妖精改め白き小悪魔はその端整な顔立ちに妖艶な笑みを浮かべ、士郎の腕に自分の腕を絡めるように抱き着いた。大人モードであるがために、しつかり成長した当たるところはしつかりと当たっている。如何せん「当ててんのよ」状態である。

「なっ!？」

顔を真っ赤にして慌てふためく士郎の耳元で【イリヤ】は囁く。

「ねえ、シロウ……」

——お姉ちゃんとデートしない？

▽▽▽

「えーつと、こういうので良かったんですか？」

「うん？」

【イリヤ】と士郎は正面合わせてテーブルに着き、ラーメンを食べていた。デートのお誘

いとは大袈裟で、実質「イリヤ」は士郎をランチに誘っただけである。

本心を言えば遊園地でも映画でも行きかけたところではあるのだが、士郎の様子から明らかにクリスマスマスの準備で買い物に来ているようだし、あまり長時間拘束するのは憚られたのだ。

しかし、それにしてもほとんど見ず知らずの相手の誘いを無下に断らないとはこれ如何に。「イリヤ」としては良かったと言えるのだが、普通に考えたらアウトな気がする。どうやらこちらの士郎も大分お人好しのようだ。いや、お人好しで済ませていいレベルかどうかはわからないが。

そんなわけで、士郎に美味しいお店を紹介してくれないかと頼んだところ、一人だつたらまず間違いなく入るのを躊躇つてしまいそうなほど年季の入った佇まいのラーメン屋を紹介された。

紹介しといてなんなのだが、といった風に不安気にこちらを伺う士郎に苦笑を浮かべる。「イリヤ」も最初は正直どうなのだと思つたレベルだ。間違つても女の子に紹介していいお店ではない。

だが、それはそれとして「イリヤ」が向こうでのクリスマスに三ヶ日と「士郎」や「桜」、「セラ」、「凜」が腕を奮つた和洋中と豪華な料理が続いていたため、手の込んだものはばらく遠慮願いたかつたのも事実だ。

「こういったものは普段はあまり食べないから、とても新鮮よ?」

外食しても洋食が中心で、「セラ」はラーメンを作ってくれない上、カップラーメンなどのインスタントの類いも体に悪いからと食べさせてもらえない。

以前、隠れてカップラーメンを口にしていた「リス」が吊し上げられ、食事抜きを言い渡されるという悲惨な結末を目にしてからはカップラーメンを見ると手が震えるようになった。

「だ、大丈夫……これは、カップラーメンじゃないから」

心なしかレンゲを持つ「イリヤ」の手が震えている気がしなくもない。

「……?新鮮、ですか?もしかしなくてもいいところのお嬢様だったりします?」

「さあ、どうかしら?少なくともお家が一般的じゃないのは確かよ」

錬金術の名門、アインツベルンを一般的であると捉えることはまず無理であろう。だが、士郎は魔術師でも魔術使いでもないようだし、そこを語る必要はない。よって、悪いが「ルビー」にもしばし黙ってもらっているのだ。

やつぱり、ラーメンは不味かったかなあ、と明らかに表情に出しながら美味しいラーメンを食べる士郎を見て「イリヤ」はクスリと笑う。

「シロウは高校生なのよね?」

「はい。あれ?俺言いましたっけ?」

「ううん。見た目からそれくらいかなあって。じゃあ、不躰な質問で悪いんだけど、将来のユメってあるのかしら？」

「将来の……夢……………」

「こうして出会ったのも何かの縁。折角だからお姉ちゃんとオハナシをしましょう？」

【イリヤ】は少しばかりの罪悪感を感じながらも軽い思考誘導の暗示をかける。

魔術に関わった【士郎】は切嗣の意思を継いで正義の味方を志した。しかし、切嗣が未だ存命で、魔術も認知しておらず、聖杯戦争という名の生死を賭けた殺し合いを経験する必要のない士郎は、何を思い、何を考え、一体どうなるのだろうか、どうなっていくのだろうか、とても興味があつた。

【イリヤ】のルビーの瞳と士郎の琥珀の瞳が交差し、沈黙が降りる。しばらく考え込むように俯いた士郎はぼそぼそと口を開いた。

「……笑いませんか？」

笑わない。いや、笑えない。【イリヤ】は他人の夢を笑えるほど高尚な人間ではない。「明確ではなくて、ひどく漠然としているんですが……」

【イリヤ】はその先の言葉を聞かずとも理解できた気がした。



「何かすみません。俺の分まで払っていただいで……」

「わたしは大人でアナタは子供。大人が払うのは当然のことよ」

「でも、デートだったんなら、男が払うのがマナーじゃないですか？」

「あら、そう？ じゃあ、次回は払ってもらおうかしら」

「へ？ 次回？」

「フフツ、次があればもう少し立派なエスコートをお願いするわ」

「あ、はい。善処します」

【イリヤ】は頬を掻きながら申し訳なきそうにする士郎を微笑まじげに見つめ、そつと、その赤銅色の髪に手を置き、優しく撫でた。未だ暗示の効力が残っているのか、恥ずかしそうにしながらも士郎はそれを受け入れる。

「心配しなくていいわ、シロウ。アナタのユメはきつと叶うから」

その言葉は士郎へと向けたものでもあり、【士郎】へと向けたものでもある。【イリヤ】は世界が変わっても変わらないものはたしかに在ることを知った。それはとても綺麗でいて、とても傲慢な夢だ。そして、
“ 衛宮士郎 ” に夢を届けるにはサンタク
ロースでは些か役不足だろう。

雪が降り始めた。どうやらこちらの世界もホワイトクリスマスになりそうだ。

▽▽▽解説▽▽▽

・本編を進めずに唐突なクリスマス物

実は士郎くんとのかりスマスデート案の他に、美遊さんに押し倒されて、そこにイリヤも突入してくる性なる夜とかいう案もあった（大嘘）。久しぶり過ぎて全体的にぐだぐだしている上に、個人的には中途半端な気がする出来具合。

・ヴィヴィッドでストライクな大人モード

設定のフライング。致命的なネタバレな気がしなくもないが、まあ、いいか。別にこの作品が魔法少女を謳った百合スポコン物（偏見）になる予定はない。

・サンタコスでティッシュ配りをしている封印指定執行者。

Q：何してるんすかダメットさん……。

A：アルバイトです。

・カップラーメンのくんだり

【リズ】が目の前で見せしめのように断罪されたことが【イリヤ】のトラウマになっていく模様。それにしても、自分で書いておいてなんだが、当作品の【セラ】さんはカップラーメンに何か怨みでもあるのだろうか……？（自問）

・ 士郎くんの夢

ボカしてるけど大体お察し。何となく分かつてはいたのに暗示まで行使した【イリヤ】さん。カーニバルなファンタズムでは一緒に昼寝するために士郎に暗示をかけたくらいだから普通にやりそうではある。